巻頭言

なぜ、今、幼・保・小の連携か

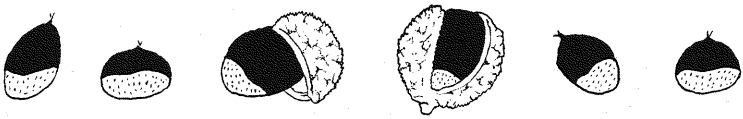
―「子どもらしさ」の回復―

佐伯　胖

今日、幼稚園・保育所・小学校の連携が叫ばれているが、「なぜ、連携が必要なのか」ということになると、必ずしも明確な根拠が示されているわけではない。たしかに、就学前の「幼児」の教育について、バラバラな考え方が乱立する中で、政府が無為無策で良いはずもなく、当然、統一的な考え方に基づいて、小学校に入る前に当然身に付けていてほしいことが、多少のバラツキがあったとしても、最低限「ここまではちゃんと身に付けていて欲しい」という項目を洗い出し、それを幼・保が連携し

て、「就学前の子どもならば当然身に付けていること」について、ある程度の共通理解を得ておくことは大切であろう。就学前の子どもについて、「どういうことがどこまで、ちゃんとできるようになっているべきか」についての統一的な考え方を持っておくことの必要性は、誰にでもわかる「幼・保連携」の理由の一つであろう。さらに、「どのような子どもに育って欲しいか」についての「望ましい子ども像」についても、幼・保の間で考え方が全く異なってしまうと、受け入れる小学校側はとまどってしまうだろう。したがって、幼・保の連携というのは、「保育する側」がなんらかの形で連携しあって、「就学前の子どもの教育」についての整合性を維持することのために、どうしても必要だといえよう。

それでは、[幼・保]と[小]の連携は、なぜ必要なのだろうか。保育者側の立場からすれば、なにしろ、「幼・保」の段階とはとてつもなく大きく異なる「小学校」という「学校」での生活に適応できるように、[幼・保]の段階である程度の「準備」をさせておくことが必要だという考え方が生まれるのは当然であろう。小学校側としても、「小学校がどういうところか」についてのある程度の心構えをもった子どもたちを受け入れたいに違いない。そのような保育者・教育者の立場から、[幼・保]と[小]との連携の必要性は、相互の「おおきな違い」を少しでも和らげて、子どもたちが問題なく適応できるようにすることの重要性から、誰しも納得するに違いない。



また、保育される側、すなわち［幼・保］の子どもたちと［小］の生徒たちにとっても、相互に異年齢の子どもと接することから、それぞれが思いやりやあこがれを抱いて関わり合うことが、双方にとって大いに意義あることだと言うことも、誰しも想像できることであろう。

このように考えると、幼・保・小の連携というのは、［幼・保］・［小］の間の意志疎通、すなわち、コミュニケーションを活発にすることによって、それぞれの「違い」から発生しがちなトラブルを少しでも減らすように、相互に「準備」しておく、ということが、その最大の理由なのだということになるだろう。

しかし、わたしはここで、これらとは全く異なる理由から、幼・保・小の連携の意義を訴えたい。

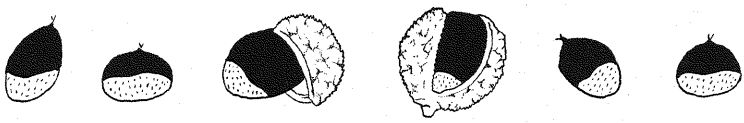
それは一言で言うと、今日あらゆるレベルの教育に「子どもらしさ」を育てることの必要性があり、その第一歩として、幼・保・小が連携し合って、「本当の子どもらしさ」を見つめ直し、その教育的意義をあらためて再確認しよう、というものである。

ここでいう「子どもらしさ（childlikeness）」というのは、いわゆる「子どもっぽさ（childishness）」ではない。

「子どもっぽさ」というのは、思慮が浅く、衝動的で、自分勝手であり、他人への配慮

がないことを指すのであり、最近では大学生でさえ、「子どもっぽい」傾向が見られる。それに対し、「子どもらしさ」というのは、アーウィン・シンガーが『心理療法の鍵概念』（鑪幹八郎訳、誠心書房、一九七六年）で提唱しているもので、年齢にかかわりなく大切な、精神的に健康で安定した人間の特性として挙げているものであり、物事に熱中し、不確実さに進んで挑戦し、世界の不思議さへの驚きを受け入れ、矛盾や葛藤を多様な発想で乗り越え、他者のことばをまっすぐに聞く、といったような性質を指すのである。

このような「子どもらしさ」は、幼児は「遊び」のなかで、ごく自然に発揮しているものである。ところが残念なことに、小学校に入り、中学校に進学するころから衰えはじめ、高等学校、大学へと進むにつれて、ほとんど見られなくなってしまう、というのが、今日の日本の現状ではないだろうか。もちろん、ごくわずかなオトナが、まさに「年齢に関係なく」この特性をもちつづけることができる。ノーベル賞級の研究をしている研究者、あるいは、ＮＨＫ番組の「プロジェクトＸ」で取り上げられるような、地道な努力を積み重ねて困難を克服した「地上の星」たちのいきざまは、まさに、「子どものような」純粋な探求心にあふれたものであると言えよう。おそらく、彼ら／彼女らは、あらゆる困難にもかかわらず、たえず「おもしろがって」没頭し、自らの理想や目標の実現のために、「放っておくわけにいかないこと」に取り組みつ



づけたに違いない。

最近、教育界では、子どもたち（大学生さえも含まれるようだが）の「学力低下」が問題にされているが、わたしはこのような「子どものような心」、すなわち「子どもらしさ」こそが、本当の「学力」（「学ぶ力」）であると言いたい。計算ドリルや漢字練習で身に付ける学力というのは、「いつでも取り戻せる学力」であるが、人は「子どもらしさ」を一度うしなうと、二度と「取り戻せない」。

いま、幼・保・小の連携で取り組まなければならないことは、あらためて、子どもたちの活動の中から「子どもらしさ」を再発見し、それが年齢にかかわりなく、生涯もちつづけるように育てるにはどうあるべきかをはっきりと打ち出して、それを中学校、高等学校、大学を過ぎても持ち続けられるべき真の「学ぶ力」（＝「学力」）として提起することではないだろうか。

（青山学院大学）